

●タングステンジグ
 60グラムをストラク
 チャーの際に沈め、
 巻き上げからのフォ
 ールで食わせた

入れ掛かりって
 ほどでは
 なかったけど、
 楽しめたよね。



◀底から5メートル巻き上げてリールのクラッチを切り、ジグをフォールさせる



▲初挑戦のトモキはシーバスを連発。スピニングロッドにベイトリールをセットしたタックルでも……。

「どうすればバレないんですか？」と金子船長に聞くと、「どうすれば……？ う、うーん、シーバスっていうのはねえ、バレやすい魚なんですよ……」と遠い目で答える。

エラ洗いで知られるように、シーバスはよく暴れる魚だ。その分、引きが強くてダイナミックなおもしろさを味わえるが、反面、どうしてもバレやすい。ハリ掛かりした場所によっては、パワフルに暴れ回るうちに口切れしてしまうこともある。

「まあ、シーバスが掛かってから強引に巻き上げようとするバラす率は高いみたいだね」と金子船長。逆に、ていねいに巻けばバラシ率を抑えられる。

取材班はひととおりシーバスキャッチに成功したが、なぜか

ヨッシーに運がない。アタリは多く検知しているが、ヒットに結びつかないのだ。

「ま、釣れるよ」

ヨッシーはあわてることなく、のんびりと構えている。これがシーバスジギングのいいところだ。「癒し」というほど簡単ではないときでも、きっと釣れるはずだと希望を捨てる。

なにしろ東京湾は、世界一のシーバスタック量と言われているほどのパラダイスなのだ。そして、それを証明するかのようによッシーもしっかりとシーバスをキャッチ。「かわいいヤツだ……」と言いつつ、ホツとため息を吐いたのだった。

金子船長の「吉岡くん、よかったじゃん」というアナウンスに笑いが湧いた。

東京湾のシーバスジギングは、ランガンスタイルだ。食いが落ち着いたところを見計らい、次つぎにポイントを変えていく。しかしこの日は北風に見舞われている。

「風がなければなあ……。もっと色んなポイントを回れるのに……」と言いつつ、懸命の操船を続ける金子船長である。

男気の人だ。その熱意は、ツ

リガチ取材班にもしっかりと伝わる。

ルアーへの反応は、確かによくない。冬場はストラクチャー周りで群れが固まるのが東京湾シーバスの習性だが、少なくとも今日は、大きな群れに当たらない。

アタリは多いし、たまにスイッチが入ったかのようにバタバタとジグにアタックしてくるときもある。「バラさないでよ」というアナウンスに若干おびえながらも、楽しい。

シーバスは引きが強いファイターだ。かなりの引きに「こつ、これは大物か……？」とドキドキしていると、意外に小型だったりする。60センチを超えてくると、ちょっとした「フアイト」という様相を呈してくる。

それが「巻いて落とす」を繰り返すだけでイージーに味わえてしまう。冬の寒い時期にもかかわらず東京湾のシーバスジギング船がにぎわうのも分かる。



▲アタリが遠くなると、「ピンクがいいよ」と船長からアドバイス